

DLNAサーバーはよく落ち
ます。

cocoratte

鉄砲伝来と種子島

鉄砲が伝来した種子島は製鉄が盛んだった。中世において、製鉄が盛んな土地が、九州を含む種子島。

つまり、種子島に鉄砲が伝来したのは、その製鉄能力と関係があるらしい。

さて、「日本書紀」推古二十六年（六一八）に、安芸国で大船を造った記事がある。という。当時の日本は新興国としての活気に満ちていた。なお、安芸国とだけ書かれており、それ以上の地名の記述はない。安芸国での造船記録は、「続日本記」に相次いで見られる。

ところで、漁船のような造船は現在でも、瀬戸内海の島々でよく見かける風景のようだ。古代の造船ドック、安芸国は瀬戸内海のいずれかの島で行われ、そのような伝統が呉市に軍港をひらかせた。と考古学者の森 浩一氏は推測している。

"小さな島でも製造能力はあり、産業は育つのである。"という指摘は示唆的だ。

参考文献：「地域学のすすめ-考古学からの提言-」（森 浩一著）

フォーンプラグ

今まで、オーディオの常識である、RCAケーブルを、恥ずかしながら、知らなかった・・・。
一応こちらはオーディオファンなのに！

RCAケーブルは、アナログ音声出力（ライン端子）を、ステレオミニ（フォーンプラグ）へと変換するケーブル。

これがないと例えば、CDプレーヤーなどからは十分な音は引き出せない。

まあ、家にRCAケーブルがあったおかげで、ソニーのブルーレイプレーヤー BDP-S190が、CDプレーヤー代わりとなったわけだが・・・。とまあ、オーディオ関係の雑感は他に譲るとして、このフォーンプラグ＝ミニプラグというのは、電話交換機用に19世紀に開発された技術の規格。

改めて、歴史的な出来事のうえに、今日の生活があるのだ。と実感したのだ。

さて、2012年もあとわずか。今年はどんな技術革新があるのか？ またどのような企業が生き残るのか？

見守っていきたい。と思うのだ。

更科日記と識字率

菅原考標女の更科日記で特筆すべきは、文字資料が残されていたこと。つまり識字率じゃないだろうか。

日本は、昔から全国的に、識字率そのものがかなり高かった。という説もあって、木簡はじつは、税となる、荷物の荷札なのだが、それらは全国各地から届けられた荷物とともに、京に集められた、まあ、今でいえば領収書みたいなものなのである。

となると木簡の文字を書いたのは地方の役人か商人あたりであると思われるのだ。

また、万葉集の頃から、東歌が収録されていたことを思うと、意外と、関東圏の文化はポテンシャルがあったようにも思われるのだ。

(なお、宮中にしまいこまれていた、更級日記が発表されたのは、のちの藤原定家の手によるものである。)

菅原考標女が、関東を去るとき、手づから彫った、小さな木彫りの仏像のことを思いやった話は有名だが、関東には、質素なお堂で、小さな仏像を前にして、ひたすら読経をおこなっていくような「小さな仏教」(草堂仏教とでもいうべきもの)のひろがりもあったのである。

思えば、今でも東京のほうが仏像ブームの幅は広いように思う。(あくまで印象論だが・・・)

)

参考文献：日本人なら知っておきたい日本文学(蛇蔵、海野凧子著)、地域学のすすめ(森浩一著)

<竹芝伝説>

「更級日記」より、13歳の旅の途中の、菅原考標女が、武蔵の国で、聞いた「竹芝伝説」。
原文となる、古文より意識を交えながら、訳してみました。

”どうしてこんな苦しい思いをするのだろう。わが國に、七つや三つ作りすえたる、酒壺に、さしわたしたる、ひたえのひさご。南風吹けば北になびき、北風ふけば南になびき、西にふけば東になびき、東にふけば西になびく。それを、見ていたのに、どうしてこんな苦しい思いをするのだろう。”

と、火たき屋の、火をたく東の国の衛士が、御前の庭を掃きながら、ひとりごち、歌っていると、それを、帝の娘である少女は、とても興味深く感じ、ただひとりで、御簾から立ち上がり、柱に寄りそって、聞いていた。

このひとりごとの歌は、たいへん愉快に思えたので、どんなひさご（ひょうたん）が、どのようにして、なびくのか？

と、そこで、御簾を押し上げて、男に言った。「その男、ここに来なさい」男はかしこまって、おそばに寄ると、「いったことを、いま一つ、わたしにきかせてくれ」と、仰るので、酒壺のことを、いまひとたび、申し上げると・・・。

「わたしは、行って見てくる。とても面白そうだ」と、男に頼むと、恐れ多く思われたが、これも前世の縁であろうと、少女を背中に負って、東の國に旅立つと、途中の橋をこわして、追っ手が、渡れないようにしながら、七日七夜で、武蔵の國に行き着いた。

帝や后は、娘がいなくなつたので、探しているところ、武蔵の國の衛士が、逃げ出したのを、知って、この男を探すことにしたが、途中の橋がこわれて、結局三月（みつき）ばかり、かかってしまった。

さて、武蔵の國に行き着いて、この男を訊ねると、帝の御娘が、答えた。「わたしは、去る必要があるとは、思えません。この男の家は住み心地がいい。この男を罰するなら、わたしは、どうしろ。というのだ。これも前世の縁であると思われるので、この旨を、帝に奏じなさい」と、おっしゃるので。

すごすごと、引き返すと、帝に、報告した。すると、その男を罰しても、娘を取り返し、都には帰せねであろう。と考え、武蔵の國の男に、娘を預けとらせた。こうして、立派な宮などを築いたのが、竹芝寺の由来である。そして、その娘が産んだ子どもたちは、やがて、武蔵という姓を得たのである。

それより、のちには、火たき屋に、女は通うようになったとか。

<風の王国>

古代チベットを舞台にした小説、風の王国（毛利志生子）三巻読む。キャラクターが、生き生きとしていて、楽しい。

ところで、このお話は古代チベット王国が吐蕃（とばん）と呼ばれていた頃、その王国に降嫁した唐側の公女、文成公主がメインヒロインである。

文成公主の、降嫁は641年。

この輿入れは唐側から、文物や制度と引き換えに、さらなる生産力の向上を図るためだったが、しかし、最終的に吐蕃は軍事強硬派のガル兄弟によって、西域の支配権をめぐって、150年にわたる、唐との抗争に突入する。

ところで、あの巨大な国際国家、唐がなぜ滅びたのか？ ネット上には、どうもピントがぼけたような説明しかないが、吐蕃などの周辺国で動きがあったとするなら、説明がつく。

アッバース朝との戦いや、新羅での反乱（当然！この戦いには友好国であった、日本も巻き込まれたわけで！）などで、西域などの安定を失うことで、唐は経済力を失い、結果的に衰退の道を進むことになる。おそらく、これは、吐蕃とも関係しているはずなのである。

なお、680年、唐と吐蕃の友好に尽力した文成公主は40年の滞在を経て吐蕃にて逝去する。

すでに吐蕃と唐は緊張関係が続いていたが、唐側は弔意を表した。

唐が一時的に崩壊し、周王朝となるのは、その10年後の690年のことである。

もっともその後も唐は栄えるのだ。

ただし吐蕃は当時、強力な国の一つだった。西域の多くを支配下におき、その覇権をかけて、唐と争うこととなる。

国際国家〈唐〉と西域（シルクロード）

唐は都を長安に置く。西域（シルクロード）からの通商（主にソグド人による）による、膨大な富が最大の要である。

まず唐（618～690、705～907）は、690年の時点でいったん周王朝と交代している。

滅びるのは、907年のことである。

傾国のパターンは、内乱により、政治力を含め、財政力・軍事力が悪化し、吐蕃（とばん）やアッバース朝ペルシャといった、周辺諸国との軋轢のなかで、西域（シルクロード）の支配を次第に失ったことで、国際的な通商システムを失い、帝国としての座を譲り渡すのである。

このあたりの歴史は、ローマ帝国を見ているみたいだ。

なお、唐の初期と重なるのは飛鳥時代後期（531年～710年）である。

隋や唐からの交易品・贈与品を通じて、国際色豊かな文化が日本でも発展した。さらに、奈良時代（710年～784年）においても、唐との交易は重視された。

ちなみに清少納言が活躍したのは、11世紀で、そのころは唐は滅んでいる。（北宋・南宋の時代）。つまり、国風文化と唐の滅亡は深くかかわっている。

唐が残したものは、律令及び、仏教、また、漢字文化圏が最大のものであろう。

唐で流行したものは胡服（ズボンと上衣を羽織るスタイル）。遊牧民族や吐蕃（古代チベットの統一国家）との間には皇帝からの、降嫁が行われたが、これも西域を重視していた現われであろう。

また、当時の長安にはペルシャからの難民であるイラン人もいた。

積極的休養

休養というのは、休んで、「養う」こと。

明日への鋭気を養い、社会的な活動力を高めること。

そして、積極的休養の方法は人によってさまざま。自分の楽しみのための時間なら、どんなことでも心身を癒し、老化防止になるもの。（「高齢社会の「生・活」事典」より）

例えば、おしゃべりもよし、運動もよし、ものづくりもよし、食べるのもよし、芸術鑑賞もよし、音楽鑑賞もよし、笑うもよし。

忘れるもよし、集うもよし。

文章を書いたりするのもストレス解消。

（参考文献：高齢社会の「生・活」事典）

植物ってどうやって細菌と戦っているの？

宇宙英雄ローダンシリーズというSFシリーズを読んでいると、次々登場する超兵器！ 未知の技術で、ヒートアップする敵キャラ！そして、さらに人類はそれに対抗すべく、次々と新技術やトリッキーな作戦を行っていく。

ところが、これに近いことは自然界でも行われているのである。

それが進化競争なんですね。

例えば、植物と細菌の関係だと、微生物（細菌）が侵入してきたとき、まずは植物は頑丈な細胞壁や気孔を閉じて、侵入を防ぐための、防御をおこなう。しかし、さらに、微生物が細胞内で増殖すると、活性酸素を大量発生させて、対抗する。もっとも、これは、当初は有効だったのだが、微生物側には、すでに対抗処置を講じられている。

そのため、微生物に対しては、活性酸素の大量発生は、シグナルとしてしか役に立たない。ところが、このシグナルをもとに、植物は、感染した細胞を含め細胞の周囲をアポトーシスさせ、微生物ごと、絶滅させる。（ちなみに植物の活性酸素のコントロール能力は動物の比ではない。だから人間を含め、動物の多くは野菜や果物を食べるのだ。）

だから、植物で一部が枯れた葉とか欠けた葉は、おそらく、植物が病気なのではなくて、微生物のもたらした、病気から治っている状態だ。

ところで、なぜ当初は有効だった、活性酸素が無効化されたのか？

近年有力視される仮説に赤の女王仮説がある。

つまり、お互いの進化が止まらない限り、生き続けるためには、植物側も微生物側も、対抗処置をとらないといけない。そのため自然淘汰によって、延々と進化は続いてきた。

そして、それが遺伝子に変異が起き易い、雌雄による生殖が生まれた理由。という仮説だ。

生物も大変だなあ。といいながら、人間だって、細菌感染などを恐れているんだから、お互い様だ。

もっとも微生物の中には、植物と共存関係に入ること、クローン生殖のみとなり、遺伝子の変化、つまり、進化を停止させた、エンドファイトという微生物もいる。この菌に感染すると、植物は多くの能力がアップする。というウソのような話。

捕鯨はなぜキリスト圏では反対されるのか？

イラストレーター志望の友人（ネット上の知り合い）から、twitter用の鳥アイコンを頂く。ところで、なぜ、人は食べていいものと、食べるべきではないものに、違いを設けるのか？ それは、その風土に適し、より良い生存環境を調整するために、さまざまな形で、生物（食）との関係を、文化として、取り入れるからである。

つまり、あるものを食べることで、その社会は、よりうまくやっていけるのか、そうではないのかが決定される。

そして、例えば、ヨーロッパでは、神との契約によって、食べるべきものと、食べてはいけないものに、境界線を引いた。そうすることで、心理的な負荷を和らげた。つまり、命あるものを、殺めることの。

そのため、ヨーロッパで一般的に食べられているものは神との契約によって、授かったもの。だから家畜を殺すことには、心理的な抵抗はあっても、うまくやっていける。

ところが、鯨にはそれがない。いってみれば、食べ物ではない。

つまり神との契約に含まれていない。

言ってみれば、捕鯨のような国際問題は、宗教的な問題とも、関わってくるのである。神との契約がヨーロッパの根底にあるから。

なお、日本では、動物供養が行われていたことを付記したい。

参考文献：「動物たちの反乱」

ふだんのこちらの英文読解・ヒアリングの点数はかなりひどいです。

といっても児童向けのペーパーバックなら一応は読めるから、問題は文法と、慣用句、聞き取り、単語力、あとライティングあたりだろう。

ようするに高校卒業後、あまり英語には力を入れてこなかったわけだ。高校のときの英語のスパルタ教育の弊害で、それ以降は、まったく勉強法とかに興味をもてない学生になっていたのだ。

(ちなみに、多くの大学は、英語力を養成する機関ではないので、くれぐれも、学生は、勉強方法などを工夫されたし。)

しいていえば、最近になって、アメリカ映画にはまって、小説の参考になればと、英語のペーパーバック(児童向け)を二十冊ほど買ったぐらい?(といっても、最近はまったく手をつけてません……。)

ただし、他の言語はわりと広く浅く齧っています(あくまで齧る程度ですが……)。第二言語だった、ドイツ語や、単語を知る上で役に立つ、ラテン語(もともと、一冊本を読んだレベル)、一ヶ月ほどCDで、勉強したイタリア語、さらに今日から始めた、フランス語と中国語。でも、英語やばいんじゃないかな?と思いながらも、中途半端な学力の悲しさで、つつい適当に読めば大丈夫!と思ってしまうところが、こちらの悪い癖。しかも。もちょっと多言語に突っ込みたい気もしているのだ。

ところで、わたしは言語系の大学に行きたかったのだが、語学の単位数が時間当たり一単位ということを知って、アウト・オブ・眼中になってしまった程度には、せこい人間である。

3Dプリンタ？

近年ブームとなっている、3Dプリンタなるものがある。

動画を何度も見ても作動原理が分からなかったのだが、あるブログを見て、機械的に動く、ノズルから溶けたプラスチックを射出し、それを集積しながら、立体を造る。という説明を読んで、ようやく納得したのだ。（なお、ホビーユースでは、あまりに小さすぎる部品は余熱時間の関係で、うまく生成できないらしい。）

確かに未来チックである。

ところで、そもそもこれに興味をもったきっかけは、これで服のボタンを作ってみたいなあ。と思ったのだ。

ネットで調べた限りでは、ボタン一個の単価はかなり高くて、一個で、最低50円、通常は、100円以上はする。

それを何個も使うから、高級な服。というのはボタンの品質が違うのだ。だから、3Dプリンタが普及すれば、まあ、せこいんだけど、安く作れるんじゃないかと……。個人的には一個一円程度までコストを下げたいなあ、と思う次第！

（*追記：母親に聞いてみたところ、ボタン一つで20円が最低価格。とのこと。謹んで訂正いたします。）

もっとも大量生産などは、今のところ、難しいようだが、例えば次のようなことはどうだろうか。

ある日、服のボタンがなくなったとする。ほつれて、とれてしまったのだ。そのとき3Dプリンタがあれば、自作できるだろう。また、例えばチェスの駒が欲しいとする。するとそれも自作できるだろう。

もちろん買うという選択肢がなくなることはないのだが、簡単なプロダクトや雑貨などなら、個人でも、自作が可能なのは大きいように思うのだ。

「山当て」

昔の漁村の子どもたちは親から、山当ての技術を学んだ。

子どもは船を漕ぐ技術は勝手に覚える。親が教えるのは、沖で船がぐるぐると回ってしまっても、位置が分かる技術。つまり山を見て、船の方向を把握する技術、山当てである。

さらに、子どもたちは、親から、季節ごとの潮の流れ、風の吹き方を教わる。

なるほどー。

でも、コンピュータやネットワークでも「山当て」ってありますよね。

コンピュータのなかで、カレント（現在位置）がぐるぐると回ってしまっても、位置が分かる技術。言い換えると、コンピュータのなかに人間を溶け込ますこと。それがコンピュータ術の基本だ。

ソーシャルな情報空間のなかで、位置を把握すること。これから必要になるのではないかと思う。

追記：今思いついたのだが、コンピュータからタブレットへの流れって、山当てとかを必要としない、安全な船。というような流れじゃないかと思った。

参考文献：「地域学のすすめー考古学からの提言ー」（森 浩一著）

「ファンロード」

江戸時代には噺問屋という企画があった。

つまりあちこちから噺をもちよって、一冊の本にしようという企画である。なるほど斬新なアイデアだが、当時の噺は複雑なものであり、アマチュアのよくするところではなかった。

時は現在。「ファンロード」という読者参加型のイラスト雑誌がある（あった？）

あれが男性向けだったらよかったのになあ。と思うのである。

あれ？

もしかして残念に思っている？ ^^ ；

だって、サーバーにアップロードするだけの、某イラストコミュニティサイトよりも・・・ねえ

。

という程度にはアナログな人間である。

江戸時代の浮世絵は一枚の絵を摺るために、最低四人以上の職人を必要とした。

ところで、どんな絵にも上手い下手はあって、それはコンピュータ絵画でも同じである。

ようするに、エクセルのマクロを使えない人やマクロが使えても、きちんと使えない人っているものだが、それと同じことだ。

つまり、イラストソフトのインターフェイス次第で、人によっては、これ以上は描けない部分がどうしても出てくる。

散々イラストに苦勞した身としては理由も分からないのに、イラストが描けない。というのは確かに、理不尽に感じたもの。

ちなみに浮世絵などは、産業殖拓として、農産物の産量が少ない土地でも推奨され、行われていたそうで、昔も今も日本人の考えることは変わらないものなのだ。（参考文献：田中優子「江戸の想像力」）

ボタニカル逍遥

ちなみに、魔方陣グルグルは違いますけれど・・・。

ひみつの植物（藤田雅矢）

美しい植物を愛でる本。

ボタニカルなセンスがあるので、読書としては、やや難易度が高いかもしれない。

ちなみに表紙の植物は、ハオルシア"オブツーザ"

植物の世界120号「まちと緑」（朝日週刊百科）

資料本として貴重。

これが550円で買える時代だったのだから、

良い時代である。

魔方陣グルグル（後藤ヒロユキ）

ただひたすら笑える痛快コミック。

名作です。

センスのいい絵柄もツボ。

「植物」という不思議な生き方（蓮見香祐）

植物学に関する、痛快な内容のポピュラーサイエンス本。

ユーモアがあり、読みやすい。

植物に対する見方が変わるのは間違いなし！

「フィトンチット」

森林には独自の作用がある。それは森林の木々からは、フィトンチットと命名された物質が放出される。

これは、殺菌作用などをもつ物質で、微生物にとっては毒となるものである。（フィトンチット＝植物・殺すという意味のラテン語）ところがこのフィトンチットは、人体には有効に作用する。詳細は不明だが、森林浴によって、ナチュラルキラー細胞や免疫グロブリンといった、免疫系が活性化する。

これはフィトンチットにたいして、免疫系が対抗しているためだ。と考えられる。

また、森林には、心理的なヒーリング作用をもつことも確かである。

さて、都市環境と森林環境は意外と似ている。

ところで田園都市の系譜について指摘しておきたいことがある。ヨーロッパはもともとは石の都市であり、都市内には、緑はなかった。それが産業革命による人口増によって、緩衝帯としてのグリーンベルトを必要とした。それが公園や庭園の由来である。

さらに、それがハワードの田園都市論へとつながる。

とすると、われわれ、日本人の都市に必要なのは、森林ではなく、良い住居なのではないだろうか？

あるいはもっと想像を逞しくすると、環境浄化タワーとか都市環境プラントなのではないだろうか？

とも思うのだ。

DLNAサーバーはよく落ちます。

DLNA サーバの再起動に成功。

Windows Media Playerによるサーバ機能って、挙動が不安定なのかしら？

よく落ちます。

ところで、このPCの再起動していて思ったんだけど、

科学そのものは、ヒトの認知システムには、備わっていない。と思う。

では、工学はどうか？ まあ、これも後天的なものだろう。

科学というのは、一つは、共同体仮説。科学コミュニティや工学コミュニティにおける、コミュニティに所属することが、科学なり、工学だったりする。

と思ったのだ。

つまりお金を出しても買えないものがあるとしたら、コミュニティや、人間関係だろう。

その意味で、コンピュータや植物、あるいは書籍はなんと「優しい」ことか。

ものとして存在するものは優しい存在だ。

とまあ、ウォークマンを聴きながら、思うのであった。

リビングバスとハウジング（最小限住居）

どうしても、日陰者扱いされがちなバスユニット。

でも、水棲人類仮説によると、人類は水辺で進化してきたらしい。（もっとも、あくまで日陰の仮説。）

例えば、裸体などは、アザラシなどと同じく、水に対する適応なのである。

また人の指には、水掻きのようなものが残っている。ということもこの仮説を裏付けているらしいのだが・・・。

それはさておき。

わたしの理想のハウジングはバスユニットがメインユニットとなった、バスリビングである。

最小限住居という概念がある。

仮設住宅の大きさは30㎡（9坪）だが、もともとは小さいことは、良いことだ。というハウジングの思想が、ポジティブな形で提唱されていたのである。

つまり、ユニットバスを拡張する形で、リビング+個室とするわけ。

そこで音楽を聴きながら、お風呂に入るわけだ。

当然PCやタブレットなども防水仕様である。

ビブリオマセマティカ（書痴数学）

物理学の基礎は測定である。という評が新聞の書評欄に載っていた。

個人的には、新聞報道も測定によらねばならない。

というのは、データ取材という手法が開発されつつあるためだが、

同時に、その測定されたデータ、つまり数というのは、

絶対的な説得力をもつからだ。

例えば、ジュール・ヴェルヌの「月世界旅行」のように、

小説を書くときは、具体的な数字を入れたり、地名を

入れるだけで、ぐっと説得力がでる。

経済から、科学、工学まで、数の測定が関与する、ジャンルは広い。

個人的には、数感覚を鍛えるためには、本とか、CDを数えるのが、お勧めなのだが、

これは、"ビブリオマセマティカ"、つまり書痴に犯されたものの、

言い訳かもしれないのだ。

ビッグサイトは公園だった！？

ビッグサイトは公園だった？

さて、ヨーロッパにおける公園の歴史を少し見てみよう。ヨーロッパにおける公園は、貴族たちの庭園に対して、都市の上流階級たちが、自分たちの社交の場を作るために、作られた。

で、なぜそれが一般に開放されたのか？というと、上流階級の社交の場に、都市階級の下層階級を入れることで、教化する。つまり教育の空間だった。

だから花や噴水で美しく飾られていた。

つまり、公園というのは、屋外空間に対する、それぞれの時代の"願望"の産物に過ぎない。というわけだ。だから、必ずしも緑や水が必要なわけではなくて、人が集まり、教えられ、秩序を保つような場所。

というわけで、東京のお台場のビッグサイトこそが現代の公園である。という説を、まあ、思いついたのである。

揺らいでいるのは？

オーディオファンが好んで採用する、ゆらぎを持たない人間。という考え方は、間違っているように感じる。

実際には、人間の聴覚はさまざまな要素によって、変動するのである。

例えば、オーディオファンは「いい音」という言葉をよく口にする。

しかし、いい音というのは、例えるなら、人間のなかで発生する「ゆらぎ」としての、認知に過ぎない。

ここで、一つ例えてみよう。

矢と的の喩えですな。

揺らいでいるのは、矢なのか的なのか？

しかし、それは射手の「心」が揺らいでいるのだ。というような話。

揺らいでいるのは、音ではなく、人間。

人間は「揺らぎ」をもっている。

その揺らぎを体感することに、オーディオの醍醐味がある。と思う。